2004 年に学会設立 20 周年を迎える

海老　久人（元事務局長）

私が事務局をお預かりした 2 ヵ年の間に、2004（平成 16）年 12 月に私たちの学会が設立 20 周年目を迎えるという記念すべき節目を迎えました。以下、「設立 20 周年記念大会」を中心に草草のことども書きとめさせていただきます。

嘘みたいな本当の秘話を一題。「20 周年記念大会」の行事をどのように具体化するか、その骨格となる原案を考えてみようということで、会長の今井光規先生、大会準備委員長就任が予定されていた西村秀夫先生と私の三人でとりあえず話し合ってみようというわけで、2003 年も暮れのおしつまった寒い一日、大阪駅改札口で落ち合うことことにしました。そこから、場所を移そうということで、近くの交差点を渡ろうと高架下で信号を待っているその時のこと、頭上にいた鳩が大量の糞を落としてきたのでした。三人のうち私のコートがもっとも被害が大きかったわけですが、この珍事が、文字通り、「運の尽き」とは洒落にもならない私にとっての波乱万丈の「記念大会」の幕開けでした。

年が明け、2004 年の夏には、それまで学会の会費など中核的活動を委ねていた「日本学会事務センター」が破産宣告を受けるという事態に立ち至り、当該年度予算計上していた総額のうち約百万円ちかい損金が発生してしまいました。この事件は折角の「記念大会」開催に深刻な陰を落とすのでは、と心底心配しました。鳩の糞は「運の付き」をもたらしてくれ、おおいに学会運営の巻き返しに力を貸してくれたのでした。

まず、学会の経済的な損害は、当時の評議員の多くの方々のご理解を得て、そのご芳志総額 103 万円を得てすみやかに穴埋めの手当てをすることができました。その直後に、文部科学省の科研費補助金申請の機会がめぐってきました。日本中世英語英文学会の「設立 20 周年記念大会」を国際学会規模として当初から企画していたおかげで、科研費申請の資格要件を充たしていることがわかり、早速申請をしました。無事「120 万円」という、学会にとっては少なからざる、天の恵みともいうべき金額が認定され交付されたのでした。

こうして、2004 年 12 月 11 日、12 日の両日、武庫川女子大学の松原良治先生をはじめ教職員、学生の皆様の力強いご協力のもとで、日本中世英語英文学会は無事「設立 20 周年記念大会」の日を迎えることができました。当時は、今もそうですが、日本中で中世研究が学問活動の周縁に追いやられそうな動きがあちこちに目につくような状況にありました。そうした停滞感を払拭して、すこしでも晴れやかな明日が来ること期待して、「明日を拓く中世：アジアからの発信」というサブタイトルを掲げ、中世英語英文学の研究の活発な討論の場を提供させていただくことができたことに安堵しました。

第一日目には、韓国から Young-Bae Park 教授(Kookmin Univ.)による”Fifty Years of Medieval English Studies in Korea – Retrospect and Prospect-“という演題で、第二日目には、

アメリカから Lee W. Patterson 教授（Yale Univ.）による”The Necessity of History: Reading Chaucer’s Clerk’s Tale”という演題で、つづいて、イギリスから Jeremy J. Smith 教授（University of Glasgow）による”Language, Class and Region in Late Medieval England”という演題でそれぞれ記念講演が行われ、「設立 20 周年記念大会」に華を添えていただくことができました。

事務局をお引き受けしていた 2 年間、今井会長の行き届いた配慮、佐藤修二副会長の簡潔にして的確な助言、横山茂樹先生には学会財政の立て直しへの尽力、なにより白井菜穂子先生には「事務センター」破産後の膨大な業務を実に献身的にこなしていただいたこと、などなど内輪での激論のあったことも含め、皆さんに助けていただいていたことが今はなつかしい思い出です。